

私は逃げない

2019年4月15日深夜、私はパトカーの音と共に聞こえた激しい雨の音で目覚めた。私は誰だろう、どこにいるのだろうかなどと少し混乱していた。しばらくしてここはわたしがとても好きな母国を離れて来た場所、つまり日本だとわかってきた。どうして私たちは母国を離れるのだろうか。

世界平和度指数が9位の日本を訪れ、快適な生活が手に入りさらにパスポートが強いと言う理由で国籍を変えたいという人もいるようだ。自分の国と比べたら他にもいろいろな理由が出てくるだろう

先ほども言ったがそのとても好きな母国は永遠の青空を持つ国モンゴルだ。13世紀の帝国だった国モンゴルは、今は、世界の中でも大気汚がひどく汚染水による土壌汚染などで知られている。日本人にとってのモンゴルは、相撲「ス・ホの白い馬」、そして草原、ゲルなどが思い浮かぶと思う。

モンゴルの首都はウランバートルでモンゴルの人口の半分ぐらいが住んでいる町だ。私はこの町に中学校を卒業し進学するために来ていた。

冬が来るとゲル地区に住む人たちは暖房方法として未処理石炭を燃やしそれによる大気汚染レベルは、世界保健機関の基準を133倍越えている。朝晩の通学や下校のとき石炭からの煙で喉や鼻が痛くなる上、前も見えなくなる。ウランバートルにはモンゴル国内のほぼすべての大学が集中している。そのため、朝のウランバートルは通勤・通学の車やバス、タクシーで大渋滞である。私の家から学校までの4,4キロメートル、ほぼ新宿駅から渋谷駅までは電車で6分で行けるが、ウランバートルの場合は、2,3時間前に家を出て氷点下30度でいつ来るのかが明らかではないバスを待つしかない。

激しい冬が去り春になると花や草の良い匂いではなく世界基準の70%にも達していないウランバートルの排水処理からの泥臭いがしてきた。そのとき原因を認識せずただいやだと思っていた。高専二年生になってバイオ工学科を選びバイオの勉強をし始めた時からいやだと思っていた匂いの原因は汚染を考えずに生活している自分たち自身であることを意識してきた。

その排水処理から出るスラッジは次の処理をされずに土に掘った穴に埋められるか、川に流されることになる。今使用している地表水と将来の宝物地下水が同時に汚れてしまっているということだ。石油会社や鉱山会社からのごみを言うもなく汚染の原因だ

こんな風に私たちの生活に最も大事な土壌、空気、水が汚れてしまいこれからどうやって自然と人間共存するかが明らかではなくなっている。これは私のような人たちが出国する十分なきっかけだと思われる。

しかし、このような理由で祖国を逃げる人もいるが、自分の将来だけでなく未来に生まれる子供たちの幸せのために頑張る人もいる。国を変えたいから同じ問題を経験した先進国を見習うために母国を離れ頑張っている人たちもいる

家を出たとたんの泥臭い匂いに嫌がるのではなくその原因と直面できる方法をわたしは探し始めた。モンゴルで一回もされたことのないバイオ回復プロジェクトで汚染水や土壌汚染が解決できることがわかった。だから技術が発展した日本の高等工業学校に入学し、微生物学やバイオテクノロジーを学びたい。

目的のバイオ回復プロジェクトを通して、モンゴルだけに限らず、汚染水の問題で悩むあらゆる人の役に立てるようにしたい。今一緒に留学している仲間たちも同じ目的だろう。

冬の朝いつ来るかがわからないバスを待つ学生たち未来を明るく想像する。その人たちの夢を一緒に持ってきた私たちは自分の幸せのためだけで祖国から逃げて来たわけではない。

皆さんも今一度自分の国について考えてみれば母国を今のままで愛し、逃げるのではなく母国のために何かできるだろう。